伊勢物語の語り手の言葉

山本利達

要旨

伊勢物語の多くの段では、登場人物に名がなく、男とか女として物語られる。それらの段のそれぞれの物語が終結した後で、登場人物と歴史上の実在人物と関係づけた説明や、あるいは、物語の中の歌や登場人物の行動を説明する内容のものが加えられることがある。前者を旧注では、作者の詞として説明されているが、賀茂真淵や藤井高尚が後人の注というようになって以来、今日までそれに従う人が多い。

現存の伊勢物語のテキストは、さまざまの人の手が加わって増益してきたものであるとみることに異論をもつ人はいない。しかし、歌物語も語られるものであり、伊勢物語は非現実的な物語が多く、また理解しにくい歌や説明のほしい言動があり、語り手は説明や感想を述べたくなるだろう。物語は作中世界に語り手の説明や感想を加えて語られるものであり、後人の注というように別人の作が物語に加わったものと扱われるべきではない。

(一)

(A)　むかし、をとこありけり。女のえうまじかりけるを、としをへて、よばひわたりけるを、からうじてぬすみいでて、いとくらきにきけり。あくたがはといふ河をゐていきければ、草のうへにおきたりけるつゆを、「かれはなにぞ」となんをとこにとひける。

ゆくさきおほく、夜もふけにければ、おにある所ともしらで、神さへいといみじうなり、あめもいたうふりければ、あばらなるくらに、女をばおくにおしいれて、をとこ、ゆみやなぐひをおひて、とぐちにをり。はや夜もあけなんと思ひつゝゐたりけるに、おに、はやひとくちにくひてけり。「あなや」といひけれど、神なるさわぎに、えきかざりけり。やう〳〵夜もあけゆくに、見れば、ゐてこし女もなし。あしずりをしてなけども、かひなし。

しらたまかなにぞと人のとひし時
つゆとこたへてきえなましものを

(B) これは二条のきさきの、いとこの女御の御もとに、つかうまつるやうにてゐたまへりけるを、かたちのいとめでたくおはしければ、ぬすみておひていでたりけるを、御せうとほりかはのおとゞ・たらうくにつねの大納言、まだ下らうにて、内へまゐりたまふに、いみじうなく人あるをきゝつけて、とゞめてとりかへしたまうてけり。それを、かくおにとはいふなりけり。まだ、いとわかうて、きさきのたゞにおはしける時とや。（校注古典叢書『伊勢物語』による）

右の文章は、伊勢物語六段である。主な注釈書は、(B)の文章について次のように述べている。

(1) この下の詞は物語の作者の、我と釈したる事なるべし。（伊勢物語愚見抄）
(2) 伊勢が詞也。註也。（伊勢物語宗長聞書）
(3) 是は作者の詞也。（伊勢物語闕疑抄・伊勢物語拾穂抄）
(4) これは作者の註なり。（勢語臆断）

(5)右二条后てふより下の詞は後人のうら書なる事已にもいへり。（伊勢物語古意）
(6)後の人のかきそへたるなり。（藤井高尚『伊勢物語新釈』）
(7)以下後注の補入か。（日本古典文学大系）
(8)第三段・第五段の末尾と同様な、注めいた部分。（日本古典文学全集）
(9)「これは、二条の后の」以下は、例によって後人の注。（新潮日本古典集成）
(10)「これは二条の后の」以下を後人の書き加えたものとする説があるが、物語の正文と読むべきである。（角川文庫）
(11)第三段・第五段の末尾と同様な、二条の后を示す注めいた部分。（新編日本古典文学全集）

『宗長聞書』は、伊勢物語は「伊勢が筆作」とする立場だから、(2)の「伊勢が詞也」とは、作者の詞というのと同じである。従って、(1)～(4)は、作者が(A)の物語について述べた注とするもので、いわば、物語世界に対する草子地としての説明とするものである。

(5)(6)(7)(8)(9)(11)は、(A)の物語に対して、後人が附した注が(B)だとするものであり、現代の注釈の大勢がその方向にある。藤井高尚は、『伊勢物語新釈』の序で、塗籠本と知顕抄の本文を折衷したといっている。知顕抄では、(B)について問答しており、塗籠本にも(B)があるのに、高尚は、(6)のように述べて本文をあげていない。

(B)を後人注とする多くの説に対し反対の(10)は、角川文庫の補注である。

（二）

六段に関する論文の中には、(B)について次のような説がある。

(12)福井貞助氏は、「いわゆる後人の注記と言われる」二条后関係の実在人物を顕わす文辞で、「これが果して本文と区別して考うべきか」問題があるとされている。(1)

(13)片桐洋一氏は、はじめ「段末注」という語を用い、伊勢物語の諸段の段末注の成立について述べられ、二条后の名の出るものは、二条后の産んだ陽成天皇の崩じた天暦二年（九四九）九月二十九日より後、二条后と業平の関係が伝説的に遠い過去のこととして伝えられるようになってからのことではないかと述べられた。(2)しかし、その後、六段の段末注については、六段を、四段五段の二条后関係の段の位置におくため、「実は鬼に喰われたのではなく、兄によって助けられたのだとして」注釈的後書が作られたので、「唯一の実相を基盤として、仮相の形で物語を作るという」物語の創作そのものに深く関与しているとして、(A)と(B)の作者は同一人と考えていられるようである。(3)

(14)森本茂氏は、「補注をつける後人は、読者の側の一人であり、備忘とか解説などの目的を持って本文に添加するのであるから、根本的に作者とは別の範疇に属するもの」とされ、人名を明らかにする部分は、後人の補注であろうと述べ、六段については、次のように述べていられる。(A)では、草の上の露を「あれは何ぞ」と女は男に尋ねているから女の心は乱れていない。鬼に食われた時、「あなや」と女は悲鳴を発したが、「神なるさわぎにえきかざりけり」というのに、(B)では「いみじうなく」とあるのは、「あなや」という悲鳴とは異なる内容で、「いみじうなく」

必然性がなく、(A)と(B)には矛盾がある。この矛盾は(B)が後人の補注だからと考えられるとされた。[4]

(15)市原愿氏は以下の理由で(B)を後注とされている。(A)では、「からうじてぬすみいでて、いとくらきにきけり」とあるのに、(B)では「ぬすみておひて」というが、女を背負ったのなら、(A)の「をとこ、ゆみやなぐひをおひてとぐちにをり」と背馳する。また、下臈とはいえ、権勢家冬嗣を祖父にもつ基経、国経が、雷鳴、豪雨の夜更けに参内ということは異常である。これは、鬼を史実化するため、基経、国経達にあばらなる蔵の近くを通るという場を作る必要から、参内という貴族にとって自然な形をとらなくてはならなかった。国経は、父長良の居た枇杷殿から参内したと考えられ、芥川やあばらなる蔵はその道筋になければならないのに、(A)の「あくたがはといふ河」という表現から受ける感じは、洛外か、洛中でも内裏からはかなり離れたさびしい場所が想像され、[5](B)の記事は(A)と微妙な食い違いがある。

なおまた、(A)の「あなや」という鬼を前にした女の絶叫に対し、(B)では「いみじうなく」とある。「あなや」という絶叫は瞬間的なもので、兄達が「きゝつけ」ることは困難だという合理的観点から、女を泣かせることによって兄達に妹の存在を知るという形をとらざるを得なかった。以上の点から、(B)は、「この物語を業平の実録的物語の一環として意図した時点に敷設されたものと思われる」といわれている。[6]

(三)

(一)において六段の(B)に対する注の主なものをあげ、(二)において六段の(B)に関する論文の説をあげた。そこに見られ

た説は、

(ア) (A)と(B)が物語として同時に成立したとするもの

(イ) (A)の成立の後に(B)が成立したと見るもの

(ウ) (A)(B)の成立を分けることに疑問をもつもの

に分かれる。(ア)は、(B)を(A)に対する作者の言葉とするもの、あるいは、(B)を後人の注とすべきでないとするものである。(イ)は、(B)を(A)に対する後人の注だとする。

現存の伊勢物語は、何段階も人手が加わって成立したものと考えられている。従って、各段の成立の先後、あるいは、一つの段のいくつかの構成要素の成立の先後関係を考察することも行われている。しかし、どの物語も、研究の対象としてでなく、作品として読むのが一般である。作品として物語を読む場合は、各段の成立の先後、それぞれの段の構成要素の成立の先後は問題にはならない。六段は、四段や五段と成立の先後を考慮に入れなければ理解できないものではない。

伊勢物語を物語として読む時、たとえば、九段の場合、八橋の段と、隅田川の段が先にあって、宇津の山と富士の山の段が後から入ったものとして読むことはない。(7) このように、伊勢物語を読む時は、現存のテキストを、段毎の成立の先後関係、一つの段の中のいくつかの段の成立の先後関係を問わずにいる。こういう立場からいえば、(A)と(B)は、成立の先後関係としてではなく、内容の性格について問題となる。

(A)は物語の世界であり、(B)は(A)の内容について、歴史上実在の人物の行為と関係づけた解説の内容となっている。物語の構成からいえば、(A)は物語世界であり、(B)は語り手から聞き手への解説の文章で、草子地というべきものであ

る。(B)がなくても(A)だけで物語でありうるが、物語の場においては、語り手は(A)を語り、次に(B)に類する解説をする場合や、しない場合があり、解説をする場合には、(B)に類するものがテキストに書かれて伝えられる場合、書かれずに伝わらない場合があるということがあろう。

(A)では、どのようにして盗み出したか、女は車に乗せたのか、徒歩だったのか、あるいは、(B)のように男が背負ったのか、男は最初から弓や胡籙を持っていたのか、あばらなる蔵の中で女はどんな思いをしていたのか等々、テキストでは読者に語ることはしていない。(A)の語るところは、「としをへてよばひける」「えうまじかりける」女を「からうじてぬすみいで」て来たところ、女は草の上の露を「かれはなにぞ」と尋ねたこと、夜もふけ雷鳴がはげしいので、男は「あばらなるくら」の奥に女を押し入れて「ゆみやなぐひをおひて、とぐちに」いたところ、女を鬼が一口に食ったと言うこと、夜があけて、女がいないことを知って、男が足ずりをして泣いたということであり、男女の言動は現実的なものとも思えない。しかし、この非現実的な表現から、深窓の女の恐ろしい目にあったこと、恋する男の不如意な嘆きを、読者は詩的真実として感じるはずである。(A)は非現実的表現による詩的真実を伝える物語とでもいえよう。

(四)

非現実的な表現は、六段の(A)のみではない。伊勢物語の中で、歌の成立事情を語るのみの段ではなく、男や女の行為や心情を語る段の多くは、現実的でなく、非現実的表現をとっている。次に、その主なものをあげてみよう。

四段 ―― 「おほきさいの宮」のいた邸に住んでいた女が、男の行き通うことのできない所へ姿を隠した。一年後、かつて女のいた所は「あばらなる」家となる。「おほきさいの宮」のいる邸宅とは思えない。現実的でなくロマン的な設定である。

五段 ―― 男の通い所は、「みそかなる所」で門から入ることができず、「わらはべのふみあけたるついひぢのくづれより」通った。主は聞きつけ、その通い路を夜毎に守らせたという。立派な邸宅を感じさせるのに、築地の崩れがあり、そこから忍んで通ったこと、また、築地を修復せず、人を据えて守らせたこと、また男の歌に打たれた主が男を許したというのは、非現実的で、ロマンチックな道具立による表現である。

二三段 ―― 丈競べの男女の家は大和、男の新しい通い所の女の家は河内の国高安の郡である。大和から龍田山を越えて高安の郡へ通うとは非現実的である。男は「ゐなかわたらひしける人の子ども」で、人にかしずかれる人物とも思えないのに、高安の郡の女の「うちとけて、てづからいひがひとりて、けこのうつは物に」盛るのを見て「心うがりて」行かなくなった。一方、丈競べの女は、「おやなく」「たよりなく」なっても「いとようけさうじて」男の心を打つ歌を詠んでいる。このような男女の存在は非現実的なことであろう。しかし、二三段が、「ゐなかわたらひしける人の子ども」でありながら、貴族的生活感覚に生きている男の心と姿が、伊勢物語諸段の主人公の変相として受けとめられるから伊勢物語の一段たりえたのであろう。

二四段 ―― 片田舎に住んでいた男が、妻を残して宮仕えに出て、三年も女のもとへやって来なかった。その間に女に「ねんごろに」いう男があらわれ、「こよひあはむ」と約束してあった夜に、元の男が戸を開けよという。女は開けず歌で言い訳する。男は嫌味な返歌をして去ろうとすると、女は「昔より心はきみによりにし物を」というが、

男は帰るので女は後を追う。女は追いつけず、清水のある所に臥し、指の血で岩に辞世の歌を書きつけ「いたづらに」なった。現実にありえたとも思えないが、劇的であり、詩的な美しさを生み出している。

六三段 ―― つくも髪の女の三郎のとりなしで在五中将は「あはれがりて」つくも髪の女と寝るが、その後男が来ないので女は男の家に行き男の動向をかいま見る。男は女をほのかに見て女の許へ行こうとする様子を見て、女は「むばら、からたちにかゝりて、家にきてうちふせり」という。女の行動は、狂したるかと思わせる程異常である。しかし、女の一途な思いは読者の胸に訴える力を持っている。

六五段 ―― 大御息所のいとこで天皇の籠愛を受けている女に、在原なりける若い男の一途な恋の行動、女が曹司に下りると人目もかまわず上がりこんで座り、女が思い余って里へ下るとそこへ通う。女も男にほだされて嘆く。二人のことを聞いた帝は、男を流罪にし、大御息所は女を退出させ蔵に籠めて折檻し、女は蔵に籠って泣いている。そこへ、男は、流された「人のくにより、夜ごとにきつつ、ふえをいとおもしろくふきて、こゑはをかしうてぞあはれに」歌う。流人が許可なく京に来れるものでもなく、たとい近流にしても、流罪地から毎夜来ることは不可能である。全く非現実的な詩的物語である。しかも、男の一途な思いと、ほだされた女の思いは、読者を感動させる。非現実の表現が力を持っている。

六九段 ―― 伊勢の斎宮の親が「つねのつかひよりは、この人よくいたはれ」といったので、狩りの使を斎宮が「ねんごろに」世話をする。男は「われてあはむ」といい、女も「いとあはじ」とも思わない。逢うことの許される筈のない斎宮に逢いたいといい、斎宮たる人がそれに応じるということだけでもありえないであろう。「女、ひとをしづめて、ねひとつばかりに、をとこのもとにきたりけり」というのも異常である。元稹の「会真記」の影響を受

けたもの、あるいは翻案されたものとの指摘があり、[8] それによる筋立にしても、斎宮が狩の使の男を訪れ、夢かうつつかの逢う瀬をもち、女の方から後朝の歌を贈ってくるというのは異常である。平安時代の物語に一般的である男女の行動の型を超えた非現実的ともいえるロマンチックな物語である。

右に見たように、伊勢物語では、非現実的表現の明らかなものが多い。このような物語を語る場合は、おのずから語り手は解説を加えることになろう。二三段や二四段等のように現存のテキストには解説の言葉がなくても、物語の場では、語り手による解説の言葉があった筈である。六段の(A)に対する(B)は、語り手の解説の言葉である。(B)は(A)の物語を語る語り手の言葉として(A)に密着して(A)と(B)とで物語は完結している。

語り手による解説には、

(あ) 3 5 6 39 65 69 79 102 104段の如き実名によってするもの
(い) 1 41 50段の如き歌や物語の内容に関するもの
(う) 9 81 87段の如き場所についてのもの
(え) 1 10 40 63段の如き昔人への賛美のもの
(お) 33 39 44 77 103段の如き歌に対する批評
(か) 15 19 75段の如き人物の性格についてのもの
(き) 32 34 42 76 90 114段の如き心情に対する感想や説明に関するもの

があり、後人注といわれているものは(あ)と(い)についてであり、(い)を後人注とするものは僅かで、主として(あ)についていわれているということになる。語り手の言葉という点では、(あ)〜(き)は同じであるのに、説明内容が実名による解説

という点から特に作者を別人と扱われたのであろうが、物語の文章としての性格からは、(あ)～(き)すべて語り手の言葉であって区別されるべきではない。

（五）

凡そ、物語において、草子地といわれる語り手の解説や意見を、物語世界の作者とは別人の作だとするのは、伊勢物語の注においてであろう。

竹取物語の「さる時よりなむ、よばひとは言ひける」とか、「これを聞きてぞ、とげなき物をばあへなしと言ひける」等という語源の解説の類は、類型的な語り手の言葉である。伊勢物語についていうならば、「そこをやつはしといひけるは、水ゆく河のくもでなれば、はしをやつわたせるによりてなむやつはしといひける」（九段）は、語り手のする地名の解説である。また「その山は、こゝにたとへば、ひえの山をはたちばかりかさねあげたらんほどして、なりはしほじりのやうになんありける」（九段）は、聞き手の都の人に対する語り手の、富士の山の高さと姿の解説の言葉である。これを作者とは別の人の付加した注とはいわないであろう。

「ついでおもしろきこととも や思ひけん。『みちのくの忍ぶもぢずりたれゆゑにみだれそめにし我ならなくに』といふうたの心ばへなり」（一段）は、「かすがののわかむらさきのすり衣しのぶのみだれかぎりしられず」の解説であり、四一段の「むさしのの心なるべし」は、「むらさきの色こき時はめもはるに野なる草木ぞわかれざりける」の歌の心の解説である。これらについては、旧注以来、「物語の作者の釈したる詞也」「記者の詞」「作者の註なり」とい

う注をつけているが、「後注の補入」とするものもある。段末にある解説だからとて、どうして後人の注ということになるのであろうか。

(二)においてあげた森本氏や市川氏の論文では、(A)の物語に対し、(B)で実名をもって解説する場合、(A)と(B)の間に矛盾する点のあることをあげて、(A)と(B)の作者を別とされている。

前述の如く、伊勢物語では、物語の表現が非現実的であるものが多く、それを実名をあげて事実らしく一分の隙もなく合理的に解説することは、作者といえども困難であろう。矛盾が生じる可能性 —— 十分に解説しえないこと —— がある。幾段階も経て成立した伊勢物語のテキストについて、成立過程を論ずることは研究として意義あることではある。しかし、作品としての物語において、(A)と(B)の作者を別人とすることは、物語表現における草子地 —— 語り手の言葉 —— を作者のものでないとすることになろう。(B)は(A)と共に作られたものとして読むべきである。

(国文学専攻　教授)

注

(1 『伊勢物語生成論』四三三頁。

(2 『伊勢物語の研究　研究篇』四七二～四七三頁。

(3 『伊勢物語の新研究』六一頁。

(4 「伊勢物語における『後人の補注』について —— 人名を明らかにする部分 ——」(平安文学研究第四十輯)

(5 芥川については、山本登朗氏の「ふたつの『芥川』 —— 室町中期物語注釈における『作り物語』の概念 ——」(国語国文六五巻四号)において、古注と旧注において、摂津国の川とするもの、内裏の塵芥を流す京や内裏の中の川とするも

のの二説を整理し批判を加えていられる。

（6　「伊勢物語六段の後注について」（中古文学十四号）

（7　片桐洋一氏は、『鑑賞日本古典文学第5巻』において、九段の成立過程として、宇津の山の段と富士の山の段は八橋の段や隅田川の段の成立より後のものと述べていられる。

（8　田辺爵氏「伊勢竹取に於ける伝奇小説の影響」（国学院雑誌、昭和9・12）目加田さくを氏『物語作家圏の研究』六八七～六八九頁、上野理氏「伊勢物語狩の使考」（国文学研究四一号）。